

シンポジウム抄録

- 開会挨拶
- 基調講演
- パネルディスカッション

開会挨拶

国土交通省中部地方整備局長
大村 哲夫



中部地方整備局長の大村でございます。

今日は年度末の大変お忙しい中、こんなに大勢の方がこのシンポジウムにご参加いただきまして心から感謝申し上げます。

国土形成計画シンポジウムということで、非常に難しい、聞き慣れない名前になっておりますけれども、これからの日本の国のあり方を皆さんと一緒に考えていこうというシンポジウムでございますので、気楽にお聞きいただければと思います。

国土づくりにつきましては、昭和37年から全国総合開発計画という形で、国土のあり方について5次にわたりまして計画を作ってきたわけでございますけれども、その計画は国土庁という役所が作っておりました。今はなくなってしまいましたけれども、私自身、3次と4次の間くらいに国土庁に在籍をしております、全国総合開発計画に関係をした経験がございます。

当時、国土庁はよく言えば霞ヶ関のシンクタンクということですが、各省庁の若手の公務員、あるいは鉄道会社の方、銀行の方が集まって、これからの国土のあり方を考える役所であったわけでございます。場所が霞ヶ関から少し離れて、麻布狸穴という所にありました。それも仮庁舎で、麻布郵便局の一部をお借りして執務していたような状態でございました。狸穴は「タヌキの穴」と書くのですね。霞ヶ関の人事権を持っている上司がいないところで集まってやっているので、非常にのびのびと仕事をしておまして、「あいつらは小タヌキ」みたいに言われていたのですが、私はその頃まだ、スッキリした顔をしていましたので小ギツネくらいでありますけれども、非常に自由闊達に議論したことを覚えております。

ちょうど25年前になるわけですが、当時の国土計画のテーマは国際化、情報化に日本の国がこれからどうやって対応していこうかという議論でございまして、25年前にすでに中部国際空港の話でありますとか、大量で低コストの国際情報シ

ステムをどのように作り上げていくかというのを一生懸命議論しました。そこにいた人たちが、元の役所に戻ったり、あるいは銀行に戻ったりされ、一緒に机を並べていた人が知事になったり国会議員になったりして、今まさにそういうものが実現しているわけでございます。そういう意味で、21世紀、これからの国土のあり方を皆様方と一緒に考えていくプロセス自体が大変大事だと私自身思っております。

これからの国土のあり方を考える上で2つの大きなポイントがあると思います。

1つは、この国土が地球温暖化という、人類が経験したことがないような急激な気候変化に見舞われることでございます。過去6,000年の間に2度の温度変化があったわけでありまして、すでにこの100年間で0.6度の温度変化があったということで、大変な温度変化の中でこの国土をどのように守っていくかという問題。

もう1つは、人口が減っていく社会になるということです。これまで戦争とか飢饉とかを除きまして、日本列島で人口が減ったことはないわけですが、これからは人口が減っていく社会を迎える。そういった中で、どのような方向で国づくりを考えていくかということだと思いますけれども、私自身が考えておりますのは、明治維新のときに富国強兵という国是を決めたわけでありまして、それで頑張ってきました。ところが、第2次大戦で“強兵”の部分はやめて“富国”、経済大国になろうということを進めてまいったわけでございます。

これから21世紀の中で、日本が世界から、アジアから憧れられる国になるためには、やはり文化力を鍛えていかなければならないのではないかと考えております。そういう意味で今日は、パネラーの皆さん、コーディネーターの皆さん、それぞれ専門の分野で非常にすばらしい見識をお持ちの方々でございますけれども、一方で個人的には非常に文化的な方々でございます。そういう方々を迎えて、今日のシンポジウムが皆さんと一緒に考えていくこれからの国づくりの一つの契機になりますことを希望申し上げまして、開会に当たりましてのご挨拶とさせていただきます。

基調講演

国土形成計画の策定に向けて ～中部の目指すべき方向～

東海旅客鉄道(株)相談役 須田 寛氏

ただいまご紹介をいただきました須田でございます。

お手元に簡単なレジュメをお配りしてございますので、それをご覧いただきながらお聞きいただければと思っております。

2つのパートに分けてお話しをしてみたいと思います。前段は、先ほど局長からもお話がございました、現在、国で策定を進めており、これは地方も一緒に進めていくことになるわけですが、国土形成計画の考え方が中部にどのような影響をもたらすのかということについてお話をしたいと思っております。後段では、私もいろいろな有識者の方々と一緒に「まんなか懇談会」と略称しておりますけれども、中部有識者懇談会というのがございます、その中部有識者懇談会でだされた提言、「まんなか懇談会ポスト万博宣言 テイクオフ中部2005」(以下、「提言」)があります。ポスト万博で一体どういことをすべきかについて、やや長期的な視野に立ってまとめたものでございます。その「提言」と、先ほどの国土形成計画との関連等をまとめながらお話しをしたいと思います。

(1) 国土形成計画の策定について (国土形成計画の考え方)

「開発計画」から「形成計画」へ…【更新】

まず、なぜ国土形成計画というものが出来たかということですが、先ほど中部地方整備局長からお話ございましたが、これはもともと全国総合開発計画と申しておりました。経済企画庁から昭和37年に発表されたわけでありまして、私はその策定作業をしております35～36年にちょうど経済企画庁におりましたものですから、この作業の第1回目、1全総の下請作業を若干手伝ったことがございます。大変な熱気でございまして、当時、所得倍増計画と合わせて、この開発計画が経済企画庁で立案されたわけでございます。

同時にまた、地方から陳情団が来たように思っております。新産業都市という地方の拠点を指定して、それを中心に地方を発展させていこう。当然そこにはインフラ投資も伴うものであ

りますから、そういう陳情が非常にたくさんあったような記憶がございます。

いずれにいたしましても「開発」という名でわかりやすく、いろいろな新しいことをやっていこうということでございまして、同時にその後、これがやや誤解を与えた面があったように思います。すでに5回の全総を経ておりまして、現在は5全総でございます。何でもかんでも各地にフルセットのインフラが整備されるのだというふうに誤解を与えた。空港・新幹線・高速道路のインフラの3点セットというのでありますが、この3つが全部出てくるのが開発計画なのだという誤解を与えたおそれがあります。それで、インフラ整備の陳情をする材料のようなものとして取られてしまった問題があったと思います。

そういう面も皆無ではなかったと思っておりますけれども、そういった誤解を解きながら、「国土の均衡ある発展」ということをずっと掲げてまいりました。「均衡ある」ということが、どこにでも新幹線や空港や高速道路を作ることだというふうに誤解されてしまったわけでありまして、そういう誤解を解きながら、そして「均衡ある発展」という言葉の意味はそのまま継承しながら、何か国民全体の共感の得られるような、現代にふさわしい計画にしていってどうか、これが国土形成計画の発想の起点であったと思います。

換言いたしますと、従来のものは日本の国がどんどん成長していく過程であったものですから、どちらかといえば開発型のものであったと思いますが、現在はすでに成熟社会になって、一応開発は行き渡りました。未開発なところも残っておりますが、全体的には一応成熟した社会になってきた。その中で、もう一度国土計画をどう考えたらいいか、考え直してみようではないか。これが今回の国土形成計画の非常に大きなポイントではない



かと思います。

したがって、いろいろな考え方がございますが、今の国土がどのような状況の中に置かれているかといいますと、たとえば人口が減っていく、高齢化が進んでいく。その中でどう対応したらよいか。国際化、情報化が非常に進んでいく。それから、地方というものが見直されて、地方主権、地方分権といったことを考えるには一体どのようなことをしていったらいいのか。そのような問題意識があると思います。

したがって、大まかに言いますと大体3つくらいの柱を立てて国土形成計画を考えたらどうかということになります。

1つは、国土づくりと地域づくりを一緒になってやっていく。地域と一緒に新しい国土計画を作る。地域が参画するウエイト、地域と一緒に作るのだというウエイトが非常に高くなってきた。

2つ目に、世界に開かれた国土でなければいけない。国際化時代でございますから、日本は世界の潮流の中で、世界の人々と一緒にやっていかなければいけないわけであります。

3つ目に、各地域がそれぞれ自立をしなければならない。国から権限委譲があるのですが、住民の身近なところで、自分たちの気持ちで政治をやっていく。地方自治でございます。そういったことを考えて、自立経済圏、自立圏というものを作らなければならない。たくさんの自立圏ができるわけですが、自立経済圏が連携をしながら、国土を形成していく。そのような考え方のものでなければいけないのではないのでしょうか。これが国土形成計画のコンセプトではないかと思えます。

国土づくりと地域づくりを一緒になって進めていく。国際的に開かれた国土にする。そして、自立経済圏が連帯をしながら、一つの大きな国づくりをしていく。このようなことではなかったかと思えます。

そして、先ほど申し上げたように、開発型から成熟社会型に変えていくためにはどういうことをしなくてはいけないか。今の3つの考え方の中で、どのようにしていくかという議論が出てくるわけでございます。今までは量的なものを追ってまいりました。高速道路を何千キロ作る、新幹線を何百キロ作る。あるいは、

いろいろな設備投資、空港を幾つ作る。そのような量の議論があったわけでありまして、これからは質の議論にしなければいけない。同じ空港でも環境と共生した、利用しやすい空港を作っていかなければいけない。それが、今後の課題である質的な問題であります。

それから、今までどんどんインフラを作ってまいりましたので、ストックがすでにできているわけです。蓄積ができていますね。そういったものをどのようにしたら活用できるか。新しく作るということよりも、今までのものをどうしたらもっとうまく使えるのか。そういう活用方策に重点を置かなければいけない。また、災害その他の実例があちらこちらにございますので、安全な、そして安心できる国土づくりをしなければいけない。

それから、今申し上げたように、地方の自立を促さなければいけない。

そのような展開がそこにあったと思います。すなわち質的なもの、ストックの活用、それから、安全・安心。大体このようなことを、今の国土形成計画を進める中で、先ほどの資料に盛り込んでいかなければいけない。

そのようなことが、この形成計画の第1番目の柱であったかと思えます。お手元のレジメに「開発から形成へ」「開発型から成熟社会型へ」と書いてあるのはそのような意味でございます。更新、国土計画を新しく作り替える。それが今度の国土形成計画の大きな考え方の一つではないかと思えます。

大体平成20年頃にはそれができなければいけないということございまして、今、国土交通省を中心といたしまして有識者の会議等で形成計画の作業が始まっております。

国と地方の協働による計画づくり…【対流】

今の国土形成計画を考える上でもう一つ重要な柱がございます。更新、性格を変えた新しい国土形成計画を作るということのほかに、対流という概念が今度の国土形成計画に非常に大きく取り上げられているということでございます。

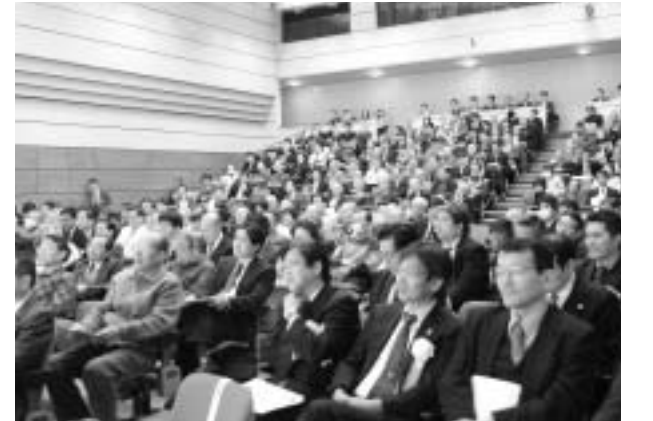
つまり、水を温めると温かい水が下から上の方に上がっていく。空気もそうですが、上の方にある冷たいものが下に下がってくる。循環しながら、対流しながら水全体が温まる、空気全体が温まる。対流現象は私どもが理科で習ったきわめて初歩的なことでありますけれども、国土計画はそういうふうにして作らなければならないのではないかと。今までは国が計画を作り、地方はそれを受けて地方の計画を作る。すなわち、国主導でやってきたわけですね。

しかし今度は、地方でも一緒になって作る。地方で作った地方のブロック計画と国の計画とを対流させる。絶えず対話をしながら、絶えず問題提起をしながら、国の方からも問題提起をしながら、考え方を循環させて、全体的に非常に熱の高い計画を作ろうではないか。それが今回の国土形成計画における非常に大きな特色でございます。

国と地方との対流の中から、両方の協働作業の中から新しいものを作っていく。国はごく基本的なポリシーを決める。具体的なことは主として地方で決める。それが今回の一つの大きなポイントではないかと思えます。

ただ、そこで問題がございますのは、地方とは一体何かということでございます。市町村別、都道府県別というのは当然ございましょう。しかし、それだけではあまりにも細分化され過ぎて、大きな国土計画には馴染まないのではないかと。それはもちろん各論としてあってもいいのだけれども、そこに必要なことは地方ブロックです。たとえば九州とか四国とか北海道というブロック。中部地区という一つのブロック。それが地方なのだと考えまして、それをやや大きく取りまとめたブロックというものを地方に置いて、それが住民の意向を反映した地方ブロック計画を作りながら国と対流をしていく。これが今回の国土形成計画の大きな特色でございます。

そこで出てまいりますのが、ブロックの切り方によって非常に性格が変わったものになり得るわけでありまして。たとえば中部であれば、北陸と一緒にやるのかということだけでも随分違ってまいります。どちらがいい悪いは別といたしまして、その性格は違ってまいります。愛知県、岐阜県、三重県、静岡県の4県だ



けで作るやり方もあるかもしれません。その場合はまた違った性格のものが出てまいります。

そう考えますと、中部はブロックの切り方がいろいろあります。北海道や四国や九州においては、議論はないわけです。しかし、中部の場合、一体どこまでが中部なのかということを考えないと計画の性格が決まらない。また、問題意識が持てないということがあります。したがって、国土交通省におかれましては、今、地方自治体のトップの意見を聞かれる、あるいは経済団体の意見を聴取されております。彼らも地方を回っているいろいろな意見を聞いておられますから、パブリックインボルブメントという言葉がございますが、地方の意思を代弁するようないろいろな方式を取りながらブロック計画を作っていくことになります。

はっきりしておりますのは、従来の中部圏整備法などは一切なくなりますので、地方が中核になっていきます。その場合、現在の中部圏整備法には9つほどの県が入っているわけでありまして、それらの県は近畿の整備計画にも入っている県もあります。たとえば滋賀県や三重県は両圏に入っているわけです。そうであればあまり議論は起こらないのですが、今度は全部都道府県の単位で割り切ってしまうと言われておりますから、滋賀県は今のところ考えてないかもしれませんが、三重県は全体が中部ブロックに入ってしまう。三重県はそれでいいのだろうかという問題は確かに残るわけです。もっとも、あまり細かな議論をし出しますと収拾がつかまず、将来の道州制の議論さえ絡んでくる可能性もありますので、ある段階では割り切らざるを得ないと思えますが、ブロック計画の作り方

という中で、圏域の決め方がこの地方にとってかなり重要なポイントになってくることを理解いたしながら、地方の意見を十分にそこに反映していただきながら圏域を決めていただく必要があると思っております。

私は、圏域を決めるためにこれからできる一つのまとまったブロックは、自立できるブロックでなければいけないと思います。そこだけが一つの国になっても自立できるようなものでなければ、そこに権限や予算をもらっても生きていけないわけですから、一つにはそういう範囲でなければいけない。そして、人間生活に関連したブロックでなければいけない。特に、水とか地形は非常に大きな影響を与えますので、そういったものを念頭に置きながらブロックの切り方を考えなければいけないのではないかと。そうした議論が「まんなか懇談会」でも出ております。関係者には申し上げていくつもりでございますけれども、そのようなブロックの切り方は、地方と国が対流するという今回の計画におきまして非常に大きな柱になっていることをご理解いただく必要があると思っております。

そして、安全・安心な国土、豊かな、ゆとりある国土づくりをするというのが結論でございます。これは異論がないところだと思いますけれども、それを成熟社会にふさわしい計画にする、そして国と地方ブロックとが対流をしながら、意見を交換しながらやっていく、国が一方的にやるのではなく我々の計画を集約しながらやっていく。そこがこれまでと大きく違っていることをご理解いただきながら、これからのいろいろな議論を見ていただきたいと思っております。



なお、国土形成計画という言葉の中には、これまでの土地利用計画などもすべて包含されます。また、各種の整備法に伴う計画等も包含されます。これ一本に集約されて、これからの国づくりの基本が決まる。そういったものでございますから、非常に重要な、将来を決める大きな計画づくりになっていくということを理解しておかなければいけないと思っております。

国土形成計画につきましては、現在、作業が進みつつあります。後ほどパネリストの皆さん方からもいろいろなご意見が出るだろうと思っておりますが、私からはやや要約しながらそのように申し上げておきたいと思っております。

(2) これからの中部 (まんなか懇談会ポスト万博宣言に示した考え方について)

次に、中部の問題に絞ってまいりたいと思っております。万博が終わりました。2,205万人というのは大変な数でありまして、成功であったことに異論の余地はないところだと思っております。しかし、それでよかったのだろうか、これだけで終わりになるということであってはならないと思うのです。これから万博の効果をこの地域全体にどのように活かしていくか、万博の開催地としてそれをいかに国全体の効果に結び付けていくか。これが私どもの大きな使命ではないかと思うのであります。また、それが万博開催地の責務ではないかと思っております。

ポスト万博と申しますけれども、万博にあれだけの人が来ていただいて成功した。この効果を定着させ、全国に波及させていくためには何をなすべきかということがまさにポスト万博だと思うわけでありまして。お手元でございます資料も「まんなか懇談会 ポスト万博宣言」と書いてございますが、万博の終わった後、何をしようかということを書いてあるのは、そのような意味合いでございます。

中部が目指す方向性 …【テイクオフ中部】

その方法論として、テイクオフ中部があります。中部が万博

の効果を起爆剤に離陸するのだということを私どもは叫びたい。万博後の中部はまさに「中部元年」を迎えています。万博が正月三ケ日のお祭りだったとすれば、4日の御用始めがこの計画であり、いよいよこれからスタートしようという状態がまさに今なのです。そういう意味合いでこの計画をご覧いただきたいと思っております。

これからの中部ということで我々がまず考えなければいけないのは、21世紀の発展の原点に中部はなりたいた。それは、万博の開催地であると同時に、立地条件からいって日本の真ん中にあるわけです。全国の人が一番アクセスしやすい、どこに行くにも中部を通らなければいけない。交通の要衝でもある。また、日本のモノづくりの中核でもある。そのような意味合いで、中部は日本の21世紀の発展の原点になっていかなければならない。そのような問題意識を持つわけでありまして。これがこの計画のすべてを網羅しております一つの思想でございます。

具体的にどのように展開するのかということにつきまして、私なりに整理してみますと3つの柱があると思っております。

1つ目は、安全で健康な国土づくりです。先ほどの形成計画にもございます。それが一番の基本ではないかと思っております。人間が安全・安心に生きていけなければ何もスタートできませんから、これが基本でございます。

2つ目に、この地域はモノづくりの地域でございます。全国のモノづくりの中核にならなければいけないわけでありまして。すでにになっているわけでありまして、これからはますますそうになっていかなければいけないと考えますと、国際競争力が必要になります。これまでは日本国内だけでやってこられたものが、これからは国際競争力を付けて、外国の企業と堂々と太刀打ちしながら、競争しながら発展できるようにできれば可能性はないわけでありまして。国際競争力のある生産拠点圏にしていきたい。これが2番目の目標ではないかと思っております。

3つ目の目標といたしましては、国際交流拠点圏づくりでございます。日本の真ん中でございますし、万博で約2,200万人の方が半年の間にお集まりいただけたということは、非常に交流しやすい地域である、そういう立地条件に恵まれているというこ

とでございます。その勢いを活かしながら、日本の、また世界の人々が集う所として交流の拠点にしていきたい。

この3つが、これからの展開を考える際の中部の方向ではなからうかと思っております。

そのために何をなすべきかという議論が出てくると思っております。安全で健康な国土づくりでは、リサイクルも含めて循環型の社会を作っていかなければ安全・健康にはなりません。防災の問題もございます。また、中部にある美しい景色を保全していく、景観の保全の問題もあると思っております。競争力のある生産拠点圏づくりのところで申し上げるならば、生産拠点の機能を高めるために、いろいろな研究拠点をもちと強化するとか、産業拠点都市をあちらこちらに確立していくとか、それらをつなぐネットワークを作るといったことが出てまいると思っております。

国際交流圏づくりにおきましては、万博では全国のモデルになるようないろいろな交通ができました。リニモもできましたし、あおなみ線もできましたし、基幹バスもできました。空港もできましたし、新しい道路もできました。いろいろなものができました。こうしたものを使って日本の交通先進地域になる要素が整ったわけでありまして、そのような交通モデル圏域を作りたい。同時にまた、交流を一番端的に促進できる方法は観光だと思っております。単なる物見遊山ではなく、国や地域の優れたものを多くの人に心を込めて見てもらい、人的交流を図りながら文化を形成していくことが観光でございます。

そのように考えますと、交流拠点づくりの一番大きなポイントは、交通インフラの整備により交通モデル地域を作ることと、中部観光圏といったものを作ることではないかと考えております。

そして、例示をするならば、環境産業・環境交流でございます。環境産業とは、何もリサイクル産業だけを言っているのではございませんで、環境との共生に配慮したあらゆる産業のことを私どもは環境産業とっております。ほとんどの産業がすでにそういう方向に向かっておられますけれども、それを促進することです。

そのためには、なんとと言っても社会資本整備が重要です。万博で整備されたものをいかにうまく活用するかということが中



心になりますけれども、社会資本をもう一度考え直してみる必要があります。

そして、産業観光でございます。産業と交流の2つを申し上げましたが、それを結ぶものが産業観光ではないかと私は思うのであります。産業観光によって産業の原点に触れる。そこからスタートします。観光する人々に来てもらって交流を始める。そこからスタートいたします。環境産業と環境交流を結ぶものとして、産業観光が位置づけられていいのではないかと思います。たとえばそういったことが、これからの展開の中で考えられると思います。

こういった3つの目標に対して3つの手段がうまく組み合わせられることによりまして、新しい国づくりが進んでまいり、また進めなければいけないという趣旨のことをここに書いていますつもりでございます。

中部における地域づくりの留意点 …【中部の使命と課題】

中部の地域づくりを進めていく上では幾つかの留意点があります。

1点目は、選択と集中ということです。換言しますと重点化ということです。総花式に事業を進めないと言うことです。これまでかなり総花式に進められてきましたが、これからは重点化をしなければいけない。重点化をするということは、その効果が

広く及ぶようなところに重点化をするという意味でございますから、地方を切り捨てるという意味では決してないわけでありまして。選択と集中ということで重点化をしていかなければいけない。それがまず一つあると思います。

2点目は、幅広い連携が必要だと思えます。中部は日本の真ん中ですから、近畿圏、首都圏、北陸地域など、様々な地域とうまく連携を図っていくとともに、連携する仲立ちになる圏域ではないかと思えます。中部の機能をフルに発揮させるためには、幅広い連携という視点で考える。産業でも交通でも、他の経済圏と連携するにはどうしたらいいだろうかということ絶えず念頭に置いて考える。その連携の中には、官民の連携も入ります。公的主体と民間とが連携することも入るわけでありまして、連携の中には必ず役割分担が生まれます。適正な役割分担をすることによって仕事が進みます。

その点を考えながら、重点的に、かつ適正な役割分担を持った幅の広い連携を、官民なり地方との間に広げていかなければいけない。これが中部に与えられた大きな使命ないしは課題ではないかと思っております。そう考えてまいりました場合に一つの方向が出てまいります。

そこで我々は「国土マインド」を持ちたい。これは「まんなか懇談会」で何人かの委員の方から出た言葉でございますが、国を思う心、地域を思う心です。この地域を大事にしていこう、どのようにいい地域にしようかということを考えていくのが国土マインド、地域マインドであります。そういうものが基本になれば、この地域をよくしていこうという基本がなければ、物事は進みません。何とか儲けてやろうというだけでは進まないわけでありまして、こういった国土マインド、地域マインドを持つことが大事だと思えます。

「ものづくりの心」の原点に立ち返れば奥深いものがあって、今日までの発展の課程とかこれからの方向が浮かび上がってまいります。産業観光を通じてそういったものづくりの原点に触れる。これも大事なことだと思います。

また、「観光する心」と申しますのは、自分たちの身の周りのものをよく見回して、他の地域の人々に心を込めてお見せした

ら、多くの人に来てもらえそうなものがたくさんあると思います。そうしたものを見つけ、それを多くの人に心を込めて見ていただく。そこから交流が始まります。絶えず身の周りのものを、観光という面から見てどのような役割を持っているのか、どのような位置づけができるのかを考えながら進めるのが「観光する心」でございます。

この3つの心、「国土マインド」「ものづくりの心」「観光する心」を皆が共有することが、この議論を進める際のスタートだと思いますし、また答えだと思えます。

万博の心を中部にいつまでも

そして、最後に「万博の心を中部にいつまでも」と私は言っております。万博で培われた心は、多くの人と交流しようという心です。あるいは、モノづくりの原点に触れようという心です。観光する心も養われました。何より大きいのは、非常に難しいと考えられた環境というものに正対する、真正面から対応していくことについて意見が一致した考え方が共有されたことは、非常に大きなことだったと思えます。「万博の心」であります。「万博の心を中部にいつまでも」というのが非常に大事なことではないかと思っております。

私どもは、この計画を中部地方整備局長にお示してまいりますときに、幾つかの要望をいたしました。たとえば、エコメッセをお作りいただいたらいかがですか。それから、伊勢湾の再生はこの地域にとって非常に大きなことなので、お考えいただいたらどうでしょうか。それから、防災が大事です。国際競争力が大事です。そのようなことについて具体的なプロジェクトチームなりをお作りいただいて、早急にお考えいただき、肉付けをしていただきたいと申し上げました。それらはほとんどスタートしてご研究いただいているところでございます。

そうしたものをさらにフィードバックいたしながら、文字どおり中部が日本の発展の原点になるように努力することが、国土形成計画に対して中部で対応できる一番大きなポイントだと思

ます。そのポイントに国の計画を対応させながら、新しい国土形成計画を作って、豊かな社会を作っていく。これが非常に大事なことではないだろうかと考えております。

ポスト万博と申します。ポスト万博というと、また新しく飛行場を作るとか、国際的なイベントを誘致するというような、陳情のターゲットを作るように思っている方がときどきいらっしゃると思います。しかし、そうではなからうと思えます。万博で得た心、「万博の心」をいつまでも我々が持ち続けながら、それを世界に広げていくこと。これがポスト万博ということだと思います。

まさに国土形成計画は、ポスト万博という考え方に立って整備されるべきものだと思っております。それにはやはり私どもがそういう気持ちを持たなければいけない。最後は心の問題になっていくのではないかと思います。「万博の心を中部にいつまでも」を合い言葉として皆様と共有したいと思えます。ご清聴ありがとうございました。